研究資料

学び・遊びと教育

田中俊也
佐伯　胖
佐藤　学

2004年9月12日～14日に、関西大学において日本心理学会第68回大会が開催された。以下は筆者らが企画・進行したシンポジウム「学習から学びへ：ごまかし勉強とauthenticな学び」における話題提供・討論内容の一部である。

本稿では、その内、佐伯・佐藤の議論を中心に、田中がその一次資料を基にしながら紙上で議論を紹介する形式とする。

口語調の部分もできるだけ手を入れずシンポジウムの雰囲気が再現できるようにしたが、同時に会話の中の冗長な部分等は「記録」としての体裁を保つために割愛・補筆したものもある。

シンポジウムそのものは150名を越える参加者を得て盛会であった。今日における「学び」と学校教育の問題についてのいくつかの共通の問題意識を参加者全員で共有できたという感を持っている。

以下、発表論文集の中からの企画趣旨やシンポジウムそのものを紹介し、引き続いて当日の内容の一部を抜粋し、今後の議論の資料としたい。

1．企画趣旨・シンポジスト

概　要（発表論文集より転載）

今日の学校教育において現れてくるさまざまな学校病理現象は、多くは「臨床心理学」的な問題だとカテゴライズされ、臨床心理学的な切り込みで研究され改善の努力をされることが多い。それは、極めて重要な視点の1つではあるが、すべてをそうした切り込み方で捉えようとすることには無理がある。何よりも、学校生活の大部分を占める「授業」と、その過程で獲得される「知識」や「スキル」の問題を抜きにしては本質的な問題は少しも解決されない。本シンポジウムでは「授業」「わかる」「できる」をキーワードにして、さまざまな段階における「学び」の問題を総合的に考えていくこととしたい。

佐伯氏はいうまでもなくわが国における「学び」研究の第一人者であり、本シンポジウムのテーマの基調となる問題提起をしていただく。最近は幼児教育に深く関わっておられるので、まずは幼児の「学び」の問題についてお話いただく。

西林氏は授業や学習論を専門にされ、『「わかる」のしくみ』『間違いだらけの学習論』（両者とも新曜社）等の著書をお持ちである。わかる、ということをまさに腑に落とす形でお話いただく。

藤沢氏は、最近『ごまかし勉強（上・下）』（新曜社）というセンセーショナルな本をお書きになった、気鋭の研究者である。中学生や高校生が「学校」というシステムのなかで「うまく立ち回れる」スキルをどのように獲得するか、非常におもしろい事例を交えてお話いただく。教師論にも深く関わっておられ、学び手と教え手の両方の側面から話題を提供していただく。

指定討論の佐藤氏は、まさに「学び」をテーマに教育学の立場から一貫して鋭い議論・考察をされ、『「学び」から逃走する子どもたち』（岩波ブックレットNo.524）は、学びの問題を

単に認知心理学や学習心理学の文脈だけで考えるのではなく、もっと大きな社会・文化的文脈で捉えることの重要さを鋭く述べた卓越した論考となっている。

わが国における「学び」の問題を考えるのに最適な話題提供者・指定討論者を得て、21世紀の学びの問題の本質に迫っていきたい。

シンポジスト

企画・司会者：田中俊也（関西大学）
話題提供者：佐伯　胖（青山学院大学）
西林克彦（宮城教育大学）
藤沢伸介（跡見学園女子大学）
指定討論者：佐藤　学（東京大学）

2．議論の一次資料

田中俊也

本日のシンポジウムを始めさせて頂きたいと思います。私は企画及び司会を務めます関西大学の田中と申します。よろしくお願いします。

本日のシンポジウムは、学習から学びへ、さらにサブタイトルとしてごまかし勉強からauthenticな学びへ、という形で、学びというものの本質的なことを議論させていただきたいと考えています。

「学びを豊かに」（田中俊也，1996）というのは私の個人的な研究のテーマのひとつでもあるのですが、「学び」を「豊かに」するというと、どうして切り離せない先生方が何名かいらっしゃいます。佐藤「学（まなぶ）」先生と、佐伯「胖（ゆたか）」先生でございます。このお二人の先生方は、私の研究のテーマにとりましても、切ってもきれない縁で、今日はこの先生方を含めて４名の先生方で議論を進めていきたいと思います。

初めにパネリストの先生方をご紹介します。

佐伯胖先生。佐伯先生はご存知のとおり、学びの研究（佐伯　胖，1975）の第一人者でございます。東京大学教育学部で長く教鞭をとられていましたが、現在は、青山学院大学の教育学科で主に幼児教育の研究を続けておられます。幼児教育ということですので、言ってみれば学びの原点に立ち戻って、さらにご研究を続けておられます。最近いろんな雑誌とか本とかをみておりますと、ご自身がまだまだ学ぶ存在だ、ということでフルートの演奏を始められたと聞いております。そうしたフルートでの学び等も通して、学びの本質的な部分についての話題をご提供いただく予定です。

それから、西林先生。西林先生は宮城教育大の学校教育講座のご所属で、学習心理および学習指導（西林克彦，1994）を専攻されています。先生のご関心は知識の問題をどう扱うかということで、知識の問題を抜きにして教育あるいは学校は語れない（田中，2004）という、私と同じスタンスをおとりでございます。是非その辺のお話を伺いたいと思っています。

それから、藤沢先生。藤沢先生は跡見学園女子大学の文学部、臨床心理学科のご所属でございます。臨床心理学科のご所属ですが、ご専攻は教育心理学です。近年、『ごまかし勉強』（藤澤伸介，2002a, b）という非常にセンセーショナルなタイトルの本をお書きになった先生で、みなさんのなかでもお読み頂いた方も多いかと思います。学力低下の問題をただ単に、生徒の問題とのみするのではなく、教師のあるいは社会の絡んだ複雑な問題なのだ、と非常に鋭い指摘をされております。

それから指定討論をお願いしておりますのは佐藤学先生です。佐藤先生は心理学に最も接点のある、教育学の領域においては極めて心理学的な部分に近い、教育方法学（佐藤　学，1996）をご専攻、研究されております。現在、大学院の教育学研究科長で大変お忙しいのですけれど

も、是非に、ということで今回お願いしました。

本日は、こうした、学びの研究における第一人者である4名の先生方にご登壇をお願いしました。

次に、今回のシンポジウムの企画者として、ごく簡単にこの企画の主旨をご紹介したいと思います。

基本的には学びの問題をその変化過程に沿って扱います。例えば、子どもたちが学校に入る以前の幼児期には学びと遊びというのは渾然一体化したものであるわけですが、それが徐々に、そうではなくなってくる、というふうになってきます。その渾然一体化した辺りの話を佐伯先生にお願いしたいと思います。

学校という制度の中にはいってしまうと、「学習」ができるということを一義的に要求されることになり、学びの本質から考えてみますと、一方すなわちワンサイドのみが強調されてくるわけです。豊かな学び、という観点からすれば、少しずつその豊かさが消されていくという状況が生じてきます。そういう中で、実際に、「うん、わかった」という、そういうわかるという喜び・楽しみよりも、パフォーマンスとして、できるということが強調されるようになってくる。そのわかる・できるというあたりのお話（西林，1997）を西林先生にお願いしたいと思います。

その「わかる・できる」の問題に関わっている内はまだいいのですが、「分からなくてもいい」「できればいい」という、パフォーマンスがとれることだけが重視されるようになってくる。これは子ども自身もそう思うし、先生たちもそう思ってしまう。そこが実は藤沢先生がおっしゃっている「ごまかし勉強」なんですね。その辺りを藤沢先生の方からお話頂きたいと思います。

全体としまして、学びというものの起源から始まって、学校という制度のなかで、徐々にその豊かさがそがれていく。その辺りを、少し単純化した図式で申し上げますと、学びから学習へ、学習から勉強へ、そういうかたちで、知を獲得する・知を運用するということの内容が貧弱になっていく、そういう状況に対しても議論を進めていきたい、というふうに思っています。

まずは、佐伯胖先生の方からお話を頂きたいと思います。

佐伯　胖：学びにおける「遊び」の意義

幼児教育の現在

今、田中先生の説明では、幼児期は学びと遊びが渾然一体となっていて、ある種の理想だというようなイメージで語られたかと思うのですが、現実の今の幼児教育の世界は、実は大変なことになっているんですね。むしろ、逆の方向にどんどん話しが進んでいる感じですね。外部評価で、幼児教育でどういう成果があがっているのか、きちっと結果を出せとか、英語なんかちゃんと教えたらどうかとか、いろんな人がいろんなこと言い始めてから、幼児教育はものすごい混乱状態なのです。そういう意味で、今の幼児教育の現状をみると、「もう遊んでいるどころではないぞ」、という感じで、少なくとも先生方の方はそれどころではない、といった状況です。

そうした状況の中で、幼児教育は、「子どもだからこういったことが大事なのだ」というようなロジックでは、太刀打ちできないことになっているのです。むしろ、人間として一番大事なことを幼児の段階から、というような、人間教育という視点から幼児教育をみていく必要があると思うのです。つまり、子どもの段階だからこういうことが必要なのだ、というような論理というよりは、人間としての成長にはこういうことが大事なんだ、というアピールをしていかないとつぶされると思うのです。

幼児段階というのは、一般に小学校段階の準

備教育、就学前教育といわれていますが、小学校段階の準備教育という意識が最近ますます強くなってきているわけで、そういった時に、やっぱりわれわれは、そういうふうに捉えてしまうのではなくて、むしろ人間としての学びということを中心に考えながら、幼児教育を考える必要がある。つまり、ある意味では、幼児教育を考えるというよりはむしろ、人間の学びを考えるというのを、幼児教育の「場」において考えるということをもっとやらねばならないのではないかなという気がしているわけです。

アトム共同保育園のできごと

「大人」はどうあるべきか、の問いから

私は、ここへ来る前に大阪の、アトム共同保育園（横川和夫，2001）というところに見学に行きました。そこは、テレビでも紹介されましたけど、本当にすばらしい保育が行われているわけです。その保育を立ち上げた人たちの話、山本健慈さんとおっしゃる、社会教育関係の人の話を聞いたわけです。ご自分の専門は幼児教育ではないとおっしゃってるのですね。和歌山大学の教授の方なのですが、その社会教育の方が、幼児教育はどうあるべきかということを考えるとき、大人として、どういう大人が本当に人間として大切なのかということを考えてらっしゃる。大人が歪んでいる、あるいは、保育園に来る保育者たちが歪んでいる、ものすごい問題を抱えている。またその保育者たちの問題、それから親たちも問題を抱えている。子を育てていく親たちです。

だからまず、保育者同士で、いったい自分たちは本来どういうふうに育てられるべきだったかという、自分自身を反面教師的に、自分たち自身のその育ちはこれでよかったのか、どこがおかしかったのか、どういう人間であるべきだったのかということをとことん話し合う。それをお互い同士が、あなたのこういうところが気に入らないとか、思ったこと言い合うみたいな格好で、人間が人間として、そういうことは変なんじゃないか、いいんじゃないかと話しをする。

そして、親御さんも、子どもの話というよりは、むしろ自分たちは、どういう世代で、どういう教育を受けてきたのかという、自分たちの教育を振り返りながら、本当にどういう人間になるのが望ましかったのかなといったことを話し合う。そこから、もっと正面に向かい合うこと、つまり、人と人とがきちっと向き合うってことを避けるように避けるようになってきたんだ、ということを反省されるわけです。

物事、人、どちらの部分にも対して、なんかうまくごまかして逃げるということばかりをずっとやってきて、それで大人になってしまっているということに気づく。これをやめなきゃいかん、ということから、じゃあ、保育はどうあるべきか、ということになります。初めてそこからスタートですね。だから、子どもがどうであるべきかなんて話じゃなくて、私たち大人はどうであるべきかという問題を徹底的に話し合うことから、自分たちは本当に人間として大事なことを学んできているかということの反省から保育を始めたわけです。

アトム共同保育園とは私は今後とも何回も行ったり来たりしたいと思うのですが、一回行っただけでは本当にわからない面があるんですね。

本気のけんか

例えば、子どもがものすごい激しいけんかをするんですね。けんかをしても、もちろん顔を傷つけあうことなんかはさせませんが、本当にとことんごまかさずに、陰ではやるな、けんかをするならみんなが見てる前でやれと、けんか場みたいなところがあって、一定のルールのなかで、みんなでそれをみながらけんかするのです。

そこで、本当に本気で向き合うことになる。何が気に入らないのか、気に入らないのはなぜか、本当はどうしたいのか、そういうことをきちっと伝え合うことをやる。そういうことの中で、ものすごく明るく、それから結果的には、すごく楽しそうな雰囲気になってくるんですね。まさに、けんかを徹底的に許すだけに、逆にすごく打ち解けた、本当に腹を割った楽しみ方を知っている。本当に子ども同士があんなに仲良く、また打ち解けあった関係をもてるかと思うような関係でやっているわけですね。

もう卒業している人たちも、中学校くらいの子同士が、離れられなくて、お互いに毎年会っているグループも結構あるようですね。つまり、あの時の、まさに親友というか、心の友というか、本当に、とことんけんかもしたし、とことん話し合ったし、とことん遊びあった関係というのは、もう一生の宝として、その関係は続いていくわけですね。

そのことのために、もとの保育園にも遊びに行くし、そこの先生たちとも親しくしているという、そういう関係ができあがるわけですね。結局大人育てのための、人間を育てるということを前提にずっとやっていった方が、結果的にはすばらしい幼児教育になっている、というようなことも非常に大事なことだと思います。

そういう観点こそが、今、幼児教育を考えるのに非常に大事であるわけです。だから、幼児の育ち合う状況よりも、むしろ人間の学びとは本来何なのかということを、人間というレベルでよく考えたうえで、それで我々は、幼児教育ということから人間の学びをむしろ、あぶりだしていきたい、こう思うわけですね。

その時に、先ほどおっしゃったように、確かに、遊びと学びは一体になっています。遊びと学びが一体になっているといえば、なんとなくおもしろそうに、楽しめるということのなかで、学びがおこなわれているというふうにとられちゃうかもしれませんけども、さっき、アトム共同保育園について言ったように、実はものすごく真剣な人間と人間とのぶつかりあいがあるからこそ、遊びというものが本心からの遊びになるわけです。そういう真正面からきちっと向き合うということ抜きに、いわゆる、単に楽しめるだけというような意味での遊び心というふうにとらえたとしたら、それは違うんですね。本心から遊べるということは、実は本当に、真剣に生きるということに向き合うということが背後にある、ということを私は考えたいと思うんですね。

学びにおける「遊び」の意義

非・計画性

学び的な側面からみて、非常に大事だと思うのは、事柄に向き合う、ということだと思うのですね。エンゲストロームがexpansive learningとco-configurationの話を東大で一週間くらい前にされた時に、goalということにむかうのではなくて、objectに集中するということが、本当の学びをすることだとおっしゃっているんですね。遊びの中で集中しているのは、事柄、object、対象、今とりかかってる事柄に熱中するということなんですね。人間と人間が向き合うこともそうなんですよね。それが「向き合う」ということなんです。

ある人と向き合ってくときは本当に向き合う。その時に「ちょっと今時間が…」とか、「なんとかがなんとかで…」とか、いろんな予定・スケジュールのなかでの関わりで、我々はだいたい普通の大人になってしまうのです。この人とはこういう関係だけで向き合うんだ、となっちゃうんです。

だから条件抜きに、まっとうに事柄にぱっと向かうということが遊びの中では重要で、その時には、実は、遊びというのは、無計画の計画という格好で、計画性が活動を縛っていかない

わけです。ということはどういうことかというと、事柄が、むしろどう関わるべきかということを次々と呼びかけてくる、という感じですね。事柄が呼びかけてくる。その呼びかけてくる事柄に我々は身を任せる。そこに没頭する。

そういう意味では、私は事柄の重要性は計画ということから解放されることだ、と思います。計画は無計画じゃなくて、あらかじめプランがあってもいいわけですね。しかしそれは、常に、事柄の成り行きによって修正されるし、展開される。そういうことが非常に、大事なことであるわけです。

おもしろさ

そのことが「おもしろさ」っていうことに次につながるわけです。おもしろさっていうのは、愉快なとか、なんとなく心地よいということ以上に、事柄の広がりがどんどん展開されていくということですね。疑問がわいてくるとか、そういったことにもなるわけですね。そういうような事柄のもつ様々な疑問だとか、その可能性だとか、そういうものをきちっと追究する。あれもこれもというのじゃなくて、一つの事柄を一貫してずっと、先行きどうなるとか、その奥はどうであるのか、もっと上手くいくのかとか、どんどん、どんどん、「こと」をめぐる問いかけだとか、可能性だとか、疑問だとか、そういうものが次々と展開していくことに我が身を預けることができる、というのが「遊び」であるのです。と同時にそれは事柄に対して、非常にsincereな、真摯な迎え方だと思うのですね。

一般に「遊びと一体化している」というと、なんとなく、おもしろがって遊んでいる子どものイメージ、俗に大人がいう遊びというイメージを持ってしまうのですが、子どもの遊びという世界は全然そういう、レジャーだとか、あるいは気晴らしとかいうようなものじゃなくて、ものすごく真剣なものなのですね。

昔、1971年ですか、国際心理学会総会があったときに、ブルーナーが発表された話なのですけど、serious playという言い方をされていましたね。赤ちゃんの遊びのことです。そういう、playの中でものすごく探求がある、非常に、新奇な何かを探らなきゃいられないものがある、そういうことがある。それが子どもの遊びなのですね。

それからもう一つ、私が先ほど言いましたアトム共同保育園でもあるのですが、いわゆるケアリング＝他者への気遣い、人の心というものにすごい気遣いをする、そのことも大切であるわけです。その気遣いが逆に対立にもなる。でも対立にもなるってことは、ある意味で、我々は「気遣いがある」ということを思い知らされるわけですね。そういう、気遣いというケアリング的側面というのは、非常に重要なわけです。

遊びに夢中になりますと、いろんなものが、道具が、遊びの遊具に変わっていくわけですね。そこらへんにあるゴミとか、あるいはガラクタみたいなものでも、すごく大事なものに見えてくるわけですね。あるいは、人でもものすごく大事な人のようにみえてくる、そういう「大事さ」っていうものが発現してくるということが遊びのすごく大事なことです。基本的にケアリングということによってその「大事さ感覚」というものを学び取っていると思うんですね。

そういうことがおもしろさに全部繋がっています。おもしろさっていうのは、なんかこう、「大事だなぁ」という感覚、このことってすごく大事なんだ、要するに勝手にポイポイ捨てられては困るんだというような、そういう感覚を言います。すなわち、人もものも、すべてに対してのケアリングだというところが、遊びという世界に含まれているという気がするわけです。

納得性

三番目に納得性ということがあります。子ど

もの探求っていうのは、繰り返し、繰り返し何回もやりますが、結局、納得するまでやるわけですよね。納得したら、ぱっとかわります。このように、こだわって、納得するまでは同じようなことを繰り返し、繰り返し、繰り返しやる。しかしその段階ではそれはやっぱり、自分の中でまだ本当に馴染んでない、まだ本当にその世界に没入できてないわけです。本当に没入して、納得できるまでは、探求をやめない（佐伯，1995）のです。

そのように納得するまで探求するというのも、子どもだからという話ではなくて、大人だって、学者になったって、あるいは、それこそ何十歳になったって、やっぱり人間としてすごく大事なんですよ。子どもの世界の中でも、そういう、とことん納得するまではあきらめない・手放さない、そのobject、対象に対して関わりをやめないというところは、すごく大事だと思います。

越境性

それから、最後に、越境性があります。

例えば、子どもがすごく楽しんで遊んだなら、家に帰ったら必ず親に「今日はこういうことやったのよ」と話さないではいられなくなる。あるいは、なんとなくおもしろいなと思ったことは、別の事に転移するんですね。ここでいう転移っていうのは、学習心理学でいうところの転移とは全然違うのです。つまり、あるところで得たそのエッセンスのようなものを別のところでも繰り返す。なんとなくそのことが、もっと拡がりをもっている、ここだけの話に留まらない、ここだけのことに留まらなくなってくるわけです。

そういう感覚というものが遊びの中にあるから、思いっきり遊んだことっていうのは、そこでのそういった思いとか、発見したこととかが一生、転移し続けるし、ずっと続く。それがauthenticityというものに繋がっていくと思います。

つまり、子どもの遊びの中には、事柄が閉じた世界の中だけには留まらなくなっていくという、そういう側面をもっているんじゃないかなと思います。

そんなわけで、幼児の段階の遊び、学びは、いわゆる、ちゃらちゃらしてるという意味での遊んでるという概念とはちがって、幼児期の遊びは、人間としてのものすごく根源的な広がりが凝縮されていることとして考えたいというわけです。

どうも、ありがとうございました。

（以下、西林克彦氏、藤澤伸介氏の話題提供が続いた。本稿では、この部分の紹介は割愛することとする。）

佐藤　学（指定討論者）

佐藤です。若干の意見も含めて３人の先生方に質問させていただく形で指定討論を勤めたいと思います。

さきほど田中先生からご紹介のありましたように、私は教育学を専門にしておりまして、今の学力問題あるいは「学びからの逃走」（佐藤，2000）という話題の当事者として、教育学者としての責任において論じたいと思います。

今日は非常にありがたいことに、心理学者を前にして話すことができるものですから、心理学者としての当事者の責任をとっていただきたい、そういうメッセージを発信するためにきました。

というのも、学力問題にしても子どもの問題、教育の問題にしてもとかく当事者性を抜きに語られるのですね。今の教育はどうなっている、今の学校はどうなっている、と。そういう議論を誰もがそうやっているものだから、何も解決しない。この行動をまず問わなきゃいけない、ということがあるものですから、まず第一義的に当事者性を議論していただきたい、というこ

とです。

先ほどのお３人の発表された内容、つまり現在の子どもや教育の問題をネガティブに捉えている状況ですね、これは共有しているように思いました。問題はそこから先なんですね。そのネガティブな状況を、どこを切り口に切り返していくのか、これについて少し考えてみたいと思います。

「勉強」と「学び」

私は、皆さんがネガティブに捉えているものについてはほぼ共有します。仮にこれを「勉強」としますと、勉強という言葉は明治20年代から使われていますが、それが「学習」という言葉に置き換えられてしまったわけですね。そちらがむしろ定着して、学習という概念は教育学者と教育心理学者しか使わないことばになってしまった。これが、基本的な状況ですね。

そこを切り替えるためには、概念自体を変えなければいけない。それで佐伯先生といっしょに使ったのが「学び」ということばなのです。

この「学び」というのは活動形である、ということが重要です。活動形というのは、learningが活動形であるのと同じです。それと、何かを媒介するわけです。何かを媒介して学びが成立する。

「学び」の伝統

学びの伝統には２つあります。１つは修養の伝統、自己完成の伝統ですね。これは、いまはちょっと置いておきます。

もう１つは対話の伝統です。対話を媒介にして学びが成立する。

この２つの伝統というものは、古代ギリシア以来ずっとあるものですね。東洋の哲学にもこの２つはあります。違った学びの意味があり、ロジックがあるわけです。今問題にしようとしている「対話の伝統」というのは、その内にコミュニケーションを組み込んだものであるわけです。

というのは、ここで議論されているのは、あくまでも学校という場、教室という場を前提にしているわけで、独学でなにかするというのは一応ちょっと外す。あるいは、教会の方で宗教的に何かめざめる、という話も、一応ここでは置いておく、ということですね。

我々が文化と呼んでいるもの、学問と呼んでいるものとどのように関与し、それを教室という場、つまり教師がいて仲間がいてカリキュラムがあって、ということを前提にした議論です。

学びの三位一体

その上で私が考えていますのは、学びというものが、これまで、学習心理学の枠組みでしか捉えられていない、ということなのです。

本来、われわれが学校で「学ぶ」というときには、必ず教師（佐藤，1989）が関与し、教師との関係が築かれ、子ども同士の関係が築かれたり消えたりするという上で成立します。それから、子どもからすれば、何かを学ぶ、ということは何らかの自分を発見することでもあるのですね。それと、関わるということですね。

これを学びの三位一体と呼んでいるわけです。要するに学びというのは意味世界の構成であり、社会的な関係の構築であり、と同時に、自己内の構築である。もう少し言いますと、意味世界との対話であり、対象との対話であり、他者との対話である、ということです。この「他者」には仲間も含みますし、友達もいるし先生もいるわけですね。

この３つが一体となって進むものですね。何かが成立して何かが消える。これは、プラスかどうかは別問題です。現象だけの問題です。何が成立し何が消えるのか、それに対して従来の学習心理学というのは、答えていない。これをいくつかの点で捉えてみたいと思います。

「勉強」から「学び」へ

この「勉強」から「学び」へ、ということに関して、私は3つの条件が必要だと考えています。

1つは、学びは媒介された活動である。脳のシナプスの結合・記憶を学習・学びと考えない。必ず活動・作業がある、ということですね。これは要するに、活動的な思考がある、あるいは問題解決的思考がある、具体的な素材がある、ということです。

2つ目は、協同がある、ということです。コミュニケーションのプロセスがある。コラボレーションがある。このコラボレーションの単位は、4人くらいがいいと思っているのです。なんらかの形で協同がそこに介在し、それを経て、新しい世界を構成・構築していく、そういうプロセスが必要だと思います。しかもこのコミュニケーションは、対話的なコミュニケーションである必要があるのです。

この「対話的」というのは、こういうことです。教室は活発に意見がでればいい、と思われがちですが、そこでは実はほとんど学びが成立していない。つまり授業が成立しているけれども学びは成立してない、という状況があるのです。学びが成立してない、というのは、既に分かっている経験や世界を反復しているにすぎない、ということです。新しい意味世界へのジャンプがない。だから何時間経ても全然状況が変わらない。

こういう風に考えますと、対話的コミュニケーションの場合には、「聴く」関係が一番ベースだと思います。ですから、学びは「受容」から始まると思います。まず聞き入れる。受容というのは古今の哲学を見ましても東西をみても、その大切さは誰もが言われていることなんですね。

だけども、先生たちは、子どもたちが活発に意見をいうことばっかりを望んでいる。あるいは従来の学習心理学をみても、そういう「受容性」で応答するようなコミュニケーションを想定していない。簡単にいいますと、メッセージの発信と受信、このメッセージ・モデルでコミュニケーションが成立している、と従来の学習心理学は捉えているのです。私が言うような学びが成立するようなコミュニケーション論を心理学者は準備していたのか、していたら教えてください。

それから、3つ目は自己の吟味の問題ですね。

学びというのは、先ほど言いましたように、必ず1つの「分かり」の「分かりなおし」であります。アイデンティティー問題が絡んでいるわけです。1つのことが分かることによって自分の存在がそこで表現される。学びは教室の中では社会的なプロセスです。

心理学の「勉強」「学習」の世界

以上言いましたように、いくつかの問題をとりあげてみますと、これまで、学習における作業や学びというものは「意欲」「関心」と議論されてしまう。意欲というのは動機づけとして議論されます。でも必要なのは、活動の場合は道具を媒介にして、対象にのめりこむような形での意味世界にはいっていくようなことが必要です。そのような意味で、従来の「動機づけ」による心理学の説明では、「勉強」の世界から抜け出しえないだろうと思います。そのことに、心理学者はどのように答えていただけるのだろうか。

学習は個人の場ではなく教室の場、さきほど言いましたように社会的な文脈を持っていますし必ずコミュニケーションを媒介にしていますね。つまり「学び」というのは学びあいの形をとっています。

しかし従来の学習論あるいは「認知」論では、個人の頭のなかしか対象として扱っていない。社会的なプロセス、あるいはコミュニケーションにおける人の関係の形成と教師と子どもの関

係の形成、それと同時に認識が成立している、ということを扱ってはこなかった。つまり、協同生成的なプロセスの心理学的な理論、こういうものを是非、今日はいい機会ですから、考えていただきたいと思います。

教育学はすごい責任を持っていると思います。ここまで日本の教育を支配し、子どもたちを学びから逃走させてしまっている、教育学自身のなかにそういう要素が沢山あると思うのです。

もしかすると、心理学のそうした概念の中にも、批判しながら実は学びからの逃走を内側からしっかり支え、それを促進するものがなかったかどうか、こういう問いかけをしていただきたいと考える次第です。

次にお一人づつに少しお聞きしたいことがあります。

まず、佐伯先生に。

佐伯先生がおっしゃったこと、非常に同意することが多くございました。目標よりも対象を、その前におっしゃった、子どもの学びよりも、幼児教育者そのものの学び、すなわち対象との向き合い方、子どもとの向き合い方が原点ではないか、とおっしゃったわけです。

先生は現在幼稚園教諭を含む教員養成事業にも関わっていらっしゃるので、一件、ご質問します。

日本の幼児教育者の一番・最大の問題は、教育を敵視していることだと思うのです。教えることをものすごく嫌うんですね。あのカルチャーはどこからきたのだろうか、ということ。これがある限り、「遊びと学びは一体だよ」といっても、ロマン主義になってしまうんです。

そこでお聞きしたいのは、ちょっとメタのレベルで聞きますが、幼児教育者がなぜそうなるか、という中に、子どもが学び・育つ上で、自然主義＝自然の中で子どもが育つのが学びなんだ、という自然主義がものすごく根深く入っているのですね。これは欧米の幼児教育の中に、ぼくは感じられない。まったく逆なんですね。

ぼくもそっちに近いんですが、文化の中でしか子どもは育ちません。自然の中では育たないですよ。文化の中で育つという、それを今の問題の中にもっと具体化したレベルで先生がお考えになっている点をお聞きしたいと思います。

そう考えると、例えば幼児教育の教員養成のなかで、数学教えないでしょう？幼稚園では数学教えないから数学知らなくていいと、そういう幼児教育やっていていいのか、ということなんですね。

なにか幼児の活動を知的に意味づけるような、あるいは学びのなかで捉えていけるようなことが、そもそも幼児教育の準備段階（教員養成の段階）で捉えられていない。文化の中で子どもが育つということと、自然の中で育つということとはいったん切らないと、とちょっとラディカルに思うのですが、先生はいかがでしょうか。

（続いて、西林克彦氏、藤澤伸介氏にも１点づつ、質問が行われたが、ここでは割愛することとする。）

佐伯　胖

大きな問題を出されたのに、時計を見るとどう考えたって一人数分しか与えられてないという風に判断するのです。

ずばり数分間で結論的に申し上げますと、確かに幼児教育は非常に、幼児という者を特殊に、霊性の高い者というか、幼児がすべて、幼児はすばらしい、という捉え方、そして自然主義的な捉え方が強いわけです。

それはしかし、教育の方でも、やっぱりデューイ思想の履き違いというのがありますね。やっぱり単元学習をやるときは子どもに自由に探求させるのがいいのだ、と言う風な考え方に

なったことが、また逆を呼んじゃった、という、色んな事があるのですね。

やっぱり、佐藤さんがおっしゃったように、文化というものの捉え方がものすごく甘い。それは幼児教育全体に言えることで、教育学全体にも、もっとこの、文化というレベルをしっかり持ってもらいたい。

私は、子どもといっしょに文化をみる、という、つまり、後ろからみるわけでもないし前に出ていくわけでもないし、一緒にみる、このことが重要だと思います。ただ見るときに、やっぱり見るべきものを教師が見えてなければいけない。という意味で、確かに養成教育の中に文化のすばらしさを味わわせる、それは数学でも科学でもいいわけですが、文化のすばらしさを味わうということのappreciation、文化というものには本当にすばらしいものがある、ということを実感して、そのことを知らないで生きていくなんてもったいない、という経験を、教師たる者、幼児教育者も是非持ってもらいたい。

そうして、子どもと、虫一匹見ても、どんなにすごい世界がその虫の奥に拡がっているか、葉っぱ一枚見ても、どんなにその奥にすごいことがいっぱいあって、その研究たるやどれだけの蓄積があってどんなすごいことがその世界の中に拡がっているか、ということを子どもといっしょに見ながら感動する。こういうことをやらないで、養成教育では好きなようにやらせばいい、とかいった形で子どものことばっかり考えるわけです。子どもを考える、こどもを見つめて子どもを育てていくと、さっきのアトム保育園の話のように、子どもって何なのか、それに合わせようとする保育ではなくて、人間っていうものを見て、そして自然、社会・文化をみて、そして本当にすばらしいものをもっとすばらしいものとして味わえるようになろうじゃないか、いっしょに、という視点での教育に変えていかなければならない、と思います。これは幼児教育だけのことではないと思います。

文　献

藤澤伸介　2002a　ごまかし勉強（上）：学力低下を助長するシステム　新曜社

藤澤伸介　2002b　ごまかし勉強（下）：ほんものの学力を求めて　新曜社

西林克彦　1994　間違いだらけの学習論：なぜ勉強が身につかないか　新曜社

西林克彦　1997　「わかる」のしくみ：「わかったつもり」からの脱出　新曜社

佐伯　胖　1975　「学び」の構造　東洋館出版社

佐伯　胖　1995　「わかる」ということの意味［新版］　岩波書店

佐藤　学　1989　教室からの改革：日米の現場から　国土社

佐藤　学　1996　教育方法学　岩波書店

佐藤　学　2000　「学び」から逃走する子どもたち　岩波ブックレットNo.524

田中俊也（編著）　1996　コンピュータがひらく豊かな教育：情報化時代の教育環境と教師　北大路書房

田中俊也　2004　思考の発達についての総合的研究　関西大学出版部

横川和夫　2001　不思議なアトムの子育て―アトム保育所は大人が育つ―　太郎次郎社

＊本稿の作成にあたって、録音テープからのテープ起こしにご協力いただいた追手門学院大学大学院の赤土季実代さん、関山信吾君、中西　誠君に深甚の謝意を表します。